

## 新フレーゲ主義と単称主義

成 瀬 翔<sup>(1)</sup>

日本福祉大学 非常勤講師

名古屋大学 大学院文学研究科 博士研究員

## Neo-Fregeanism and Singularism

Sho NARUSE

Part-time Lecturer, Nihon Fukushi University

Postdoctoral Fellow, Nagoya University, Graduate School of Letters.

Keywords : 言語哲学, 単称主義, 新フレーゲ主義, 心的ファイル, フレーゲ

### Abstract

When we examine the theory of singular thought, we encounter a serious problem caused by a Russellian acquaintance. However, Francois Recanati and his followers present Singularism without acquaintance. Their position is called 'Neo-Fregeanism'. This paper will examine Neo-Fregean Singularism.

The contents of this paper are as follows. In Section 2, I will examine Singularism and Descriptivism. In Section 3, I will introduce Recanati's Mental file-framework and his Singularism. Finally, in Section 4, I will criticize Recanati's theory, and present more modest-theory.

### 1. はじめに

ゴットローブ・フレーゲ (Gottlob Frege) の言語哲学に対する最大の貢献は、意味論の原型を構築したことにある。このフレーゲの意味論の根本的着想は、意義 (Sinn) と意味 (Bedeutung) というふたつの意味論的アスペクトを認めることである。フレーゲの基本的な考え方は、次のようなものであった。言語表現の意味とは指示であるが、意味は意義によって仲介されることによって、世界のものと対応する。意義は意味の与えられ方を規定するものであり、意義を把握することで、

言語使用者は内容の相違を理解し、それを説明することができる。つまり、意義には、言語理解の相関者としての役割と、言語から世界のものごとの通路を付けるものとしての役割を担っているのである。

しかし、このようなフレーゲの発想に基づいて、言語表現とその使用者、世界のものごととの三項関係を説明することには、根強い批判があった。その代表的な批判者がバートランド・ラッセル (Bertrand Russell) である。ラッセルは、フレーゲ的意義を通して特定の対象を語る場合、われわれは間接的仕方では対象について語

ることはできず、その対象について直接的に語る事ができなければ、知識や信念の対象にならないと考えた。すなわち、ラッセルはフレーゲの発想とは別の仕方人間と言語、対象との関係を説明しなければ、言語と世界内の直接的な関係を確保できないとみなしたのである。

フレーゲとラッセルとの対立は、「単称主義 (Singularism)」と「記述主義 (Descriptivism)」と呼ばれる対立する陣営の論争として継承されている。この論争の核心は、人間はいかにして対象とかがわかるのか、という極めて原理的かつ壮大な問題関心にある。やや戯画的に描写するならば、単称主義はラッセルの発想を受け継ぎ、人間と対象との言語を介さない直接的な接触 (見知り (acquaintance)) を想定し、それによって人間はその対象について思考することができると主張する。これに対し、記述主義はフレーゲの発想を受け継ぎ、人間と対象とのかかわりは言語的記述を介して行われ、この言語的記述を通じて思考することができると主張する。記述主義を擁護する哲学者にとって、単称主義者が想定する対象との前言語的かかわりとしての見知りは哲学的ドグマ以外のなにものでもなく、このような想定は正当化することはできない。そして、記述主義者は、単称主義が対象との直接的な関係を想定するために様々な困難に遭遇すると批判する。したがって、単称主義者は記述主義の立場に立つ哲学者からの批判に対して、対象との直接的な関係を認めることの正当性を示さなければならない。

本稿の目的は、単称主義と記述主義の論争を概観し、その焦点を明らかにすることによって単称主義を擁護することにある。本稿の構成は以下のとおりである。2節ではこれまでの言語哲学の議論を検討する。2.1 では、フレーゲとラッセルとのあいだでなされた論争に立ち返って問題の原型を確認した後に、2.2 ではラッセルが単称思想を保持するために対象についての見知りを要求したことを確認する。2.3 において、ラッセルの見知りを批判し、単称思想を考慮する必要はないと主張する記述主義の議論を踏まえ、2.4 では記述主義の批判に対して単称主義を擁護するガレス・エヴァンズ (Gareth Evans) の議論を取り扱う。3節では、エヴァンズの議論を継承したフランソワ・レカナティ (Francois Recanati) の心的ファイルを導入したフレームワークにおいて、単称主義がどのように擁護されるのかを検討する。3.1 では、レカナティが提唱する心的ファイルの位置付けを扱い、3.2 では見知りを持たない対象にかかわる単称思想に関

する議論を検討する。3.3 において、レカナティの心的ファイル・フレームワークにおけるファイル間のオペレーションを確認し、どのように単称思想が擁護されるのかを扱う。最後に、4節では以上の議論を振り返った後に、レカナティ流の単称主義の問題点を検討し、単称主義をめぐる議論に新しい光を当てることを目指す。

## 2. 単称主義 vs. 記述主義

### 2.1 前史 フレーゲ＝ラッセル論争

言語哲学における単称思想をめぐる議論は、フレーゲとラッセルの書簡を通じた論争にまでさかのぼることができる。ラッセルはフレーゲへ『算術の基本法則』に含まれるパラドクスを報告したのちに、意義と意味などのフレーゲの体系における言語哲学的概念についての議論を行う。そこで両者の立場の相違が明白に浮かび上がるのが、文が表現する命題 (proposition) にかかわる問題である。フレーゲはラッセルに宛てて自身の立場を次のように説明する。

フレーゲよりラッセル宛書簡 18 (1904/11/13)

...雪原を頂いたモンブラン自体は、モンブランは4000メートル以上の高さがあるという思想の構成要素ではありません。...「月」という語の意義は、月は地球よりも小さいという思想の構成要素です。月自体 (「月」という語の意味 (Bedeutung)) は、「月」という語の意義 (Sinn) の一部ではありません。 (Frege 1976, p.245, 邦訳, p.161)

フレーゲの説明を受けて、ラッセルは次のように主張する。

ラッセルよりフレーゲ宛書簡 19 (1904/12/12)

モンブランは、その雪原すべてにもかかわらず、「モンブランは4000メートル以上の高さである」という命題で実際に主張されているものの構成要素であると私は考えます。...これは私の見解によれば、ある複合体 (客観的命題 (ein objectiver Satz) と呼べるでしょう) であって、モンブランそのものがその構成要素です。このことを認めないと、われわれはモンブランそのものについてはなにも知らないことになるでしょう。 (Frege 1976, pp.250-251, 邦訳, pp.168-169)

フレーゲの体系において、文が表現し、われわれの知識や信念の対象となるのは、「思想 (Gedanke)」とフレーゲが呼ぶ存在者である。フレーゲの見解では、思想は文

の意味 (Bedeutung) ではなく、意義 (Sinn) であり、上述の引用における「モンブランは4000メートル以上の高さがある」という文では、思想の構成要素は名前「モンブラン」の指示対象であるモンブランそのものではなく、その意義である。つまり、「モンブランは4000メートル以上の高さがある」という文の表現する思想の構成要素は、モンブランという対象の「与えられ方」ないし「提示の様態 (Art des Gegebenseins)」となっている存在者に他ならない。

これに対して、ラッセルは主張や知識の対象となるのは、「客観的命題」であり、「その雪原すべてにもかかわらず」モンブランが含まれていると主張している。ここでラッセルが「客観的命題」と呼ぶ命題こそが、現代の言語哲学において「単称命題 (singular proposition)」と呼ばれる命題である。単称命題は、ある特定の対象を構成要素として含む命題、すなわち個体と一般的性質を含む順序対として定義される。そして、単称命題の内容は「単称思想 (singular thought)」と呼ばれる。ラッセルの主張では、このような単称命題と単称思想を受け入れなければ、特定の対象についての知識を獲得したり、信念を保持したりすることはできない。換言すれば、ラッセルは対象との直接的関係を表現するような単称命題を認めなければ、その当該の対象についての知識や信念を保持できないと考えたのである。

## 2.2 単称思想と記述的思想

以上のようなラッセルとフレーゲの対立は、知識や信念の対象となる命題 (フレーゲ的には思想) が、どのように実在の対象にかかわるのかという点にある。ラッセルにとって、実在の対象について知識を獲得し、主体が信念を抱くためには、フレーゲ的意義や記述を通じた間接的仕方によって命題を表現するだけでは不十分であった。それゆえ、より直接的仕方に対象に関する命題、すなわち単称命題の可能性を排除するフレーゲの意味論をラッセルは拒絶した。この結果、ラッセルは固有名の意味論的機能は指示機能のみであり、フレーゲが主張したように対象の指示決定の機能を果たす意義のような機能をもたないと主張した。

このように直接的に対象に関する単称思想を認めるため、ラッセルは命題ないし思想についてふたつの区分を与える。ひとつは、記述や伝聞などの情報伝達を通じて獲得された対象にかかわる記述的命題 (descriptive

proposition) ないし記述的思想 (descriptive thought) であり、もうひとつは記述によらない単称命題ないし単称思想である。しかし、記述によらずに直接的に対象にかかわるということは、どのようなことなのか。ラッセルは対象についての直接性を「見知り」によって確保し、単称思想を保持するためには個体的対象を見知っていないなければならないと主張する。ここで注意しなければならない点は、見知りは典型的には知覚的経験を含むが、端的に対象を知覚しているのみならず、その知覚が誤りえないということが要請されるということである。この見知りについての要求は、見知りの判断の誤りを回避するための方針であるが、しばしばわれわれは錯覚や見間違いのような対象の誤った見知りをもつ。このため、ラッセルは見知りの対象を、われわれの感覚を通じて与えられたもの、すなわち「センス・データ (sense data)」に限定することによって誤りを回避しようとした。たとえば、道に落ちているロープをヘビに見間違えたとしても、主体はそのようなセンス・データをもっている。

しかし、ラッセルの見知りの基準は以下のような帰結を伴う。

われわれが見知った対象の中には (センス・データに対立するものとしての) 物理的对象は含まれず、他者の心も含まれない。これらのものは私が「記述による知識」と呼ぶものによってわれわれに知られる。(Russell 1912, p.81)

ラッセルの見知りの基準では、外界の個体的対象はすべて除外され、主体はただそれらのセンス・データを見知るに過ぎない。したがって、見知りによらない対象についての思想は、すべて記述的思想とみなされる。

## 2.3 記述主義

見知りの対象としてのセンス・データについて様々な批判がなされてきた。その代表的批判者であるチザム (Roderick Chisholm) は、「斑模様の鶏 (speckled hen)」という例を挙げる (Chisholm 1942)。ラッセルは見知りの対象としてのセンス・データを誤りえないと考えたが、チザムはセンス・データを所有しても、鶏の斑点が正確にいくつあるかを述べることは出来ないと主張し、ラッセルの基準を批判する<sup>(2)</sup>。さらに、単称思想を抱くための見知りについても厳しい批判がなされている。近年においても、ジョン・ホーソン (John Howthorne) とデイヴィッド・マンリー (David Manley) は、「見知

りは、言語哲学と心の哲学における過去の時代の不要な遺物である」と主張し、対象についての直接的見知りが前言語的な認知と世界とのつながりを与えるというラッセルの主張を哲学的ドグマとみなす (Hawthorne and Manley 2012, p.25).

このように、ラッセル以後の言語哲学において、単称思想を認める単称主義は「記述主義 (Descriptivism)」と呼ばれる立場から激しい批判を受けていた。記述主義によれば、個体的対象に対する主体の心的関係は、それらの対象の性質を通じてのみ獲得されるとみなす。つまり、対象はなんであれそれがもつと主体がみなす性質を例化するもの (instantiators) としてのみ与えられるため、それらの対象に関する思想はすべて記述的思想であり、単称思想の余地は存在しない。たとえば、飯田隆は、その人物がもつと主体がみなすすべて (あるいは大半) の性質 (『言語哲学大全』の著者である、「イダ・タカシ」と呼ばれる、特定の外見をもつ、特定の歴史をもつ (e.g. しかじかの年に成瀬の先生だった), etc.) をもつ  $x$  として与えられる。チャールズ・チャステイン (Charles Chastain) は次のように記述主義の対象の獲得を説明する。

われわれは意味論的なあてずっぽう (shot in the dark) によって物理的对象を得る。われわれは特定の性質ないし関係を指定し、それらが一意的に (uniquely) 例化されることを期待する。

(Chastain 1975, p.254)

記述主義において単称名辞が指示する個体的対象は、確定記述の形をとる記述条件 'the F' を充足する対象として主体に与えられる。したがって、個体的対象を含む言明 'a is G' は記述条件を含む 'The F is G' へと翻訳され、さらにラッセルの記述理論によって 'The F is G' は 'An F is G', 'Every F is G', 'No F is G' のような一般命題を表現するとみなされる。たとえば、「飯田隆は哲学者である」という言明は、「ある  $x$  について、ある  $y$  について、 $x$  はしかじかの性質 (e.g. 『言語哲学大全』の著者) をもち、かつ  $y$  は哲学者であり、 $x=y$  である」という個体を含まない一般命題を表現する。そのため、単称命題ないし単称思想を考慮する必要はないと記述主義は考える。

## 2.4 単称主義

このように記述主義は、記述によってしか対象を知り

えないと主張する方針を選択することにより、見知りを放棄し、単称思想を放棄する。これに対し、単称主義の擁護は、フレーゲ的指示論と記述理論の提唱者としてのラッセルを批判したクリプキ (Saul Kripke), カプラン (David Kaplan), ペリー (John Perry) 等による直接指示の理論によって行われた。直接指示の理論は、「飯田隆」のような固有名や「私」や「ここ」のような指標詞による指示の直接性や純粋性についての直観を受け入れることによって成り立つ。直接指示の理論の擁護者は、十分な単称名辞の理論が単称思想の理論を要求すると主張し、単称主義を擁護する。

しかし、単称主義にとって「認知的重要性の問題 (problem of cognitive significance)」と呼ばれる難問が残っている。この問題は、同一の対象についての異なる文や言明が、同一の単称命題ないし単称思想を表現することになるというものである。たとえば、次のふたつの文を例に取ろう。

(1) キケロはローマの弁論家である。

(2) タリーはローマの弁論家である。

文 (1) と (2) は同一人物について述べており、同一の単称命題を表現する。しかし、われわれは、(1) を真だと認めたとしても、(2) に現れる固有名「タリー」がキケロのミドルネーム (の英語読み) であることを知らないために、この文を偽であるとみなす人物を容易に想定できるだろう。フレーゲや記述主義では、(1) と (2) に現れるふたつの固有名「キケロ」と「タリー」に結び付けられる意義ないし記述が異なるために、これらの文の認知的重要性が異なると説明することができる。しかし、単称主義ではこれらのふたつの文は同一の単称命題を表現するとみなさなくてはならないため、その差異を説明することはできないのである。

このように、認知的重要性の問題に対して単称主義は回答しなくてはならないが、どのように回答するのかは後回しにして、以下ではカプラン等の直接指示説とは一線を画しながらも、単称主義を擁護したエヴァンズの議論を検討しよう。

エヴァンズは、ラッセルの見知りのアイディアを継承し、単称思想を擁護する。しかしエヴァンズの議論は、ラッセルの見知りをそのまま導入するのではなく、外界の対象を含むように見知りを拡張することによって、単称思想を許容することができることを目指す。エヴァンズの基本的アイディアは、記述を通じた間接的指

示（あるいは指示対象についての間接的思考）と直接的な対象指示（あるいは指示対象についての直接的思考）というふたつのラッセルの様態を認めることから出発する。エヴァンズは直接的対象指示の機能を果たす単称名辞を「ラッセル的単称名辞 (Russellian singular term)」と呼び、その身分を擁護する (Evans 1982, p.71)。エヴァンズは、ラッセル的単称名辞を、ある単称名辞が指示対象を持たない場合、それを含む文を発話する話者はなにも語っていないような単称名辞であると定義し、ラッセル的単称名辞を含む文を理解するためには、聞き手が次のようなタイプの思想を保持しなければならないと主張する。すなわち、聞き手は指示対象が存在しなければ保持することができないラッセル的思想を保持しなければならない。Evans (1982) の議論は、指標詞を含む直示的単称名辞を中心に論じ、そのような単称名辞が使用される場合、聞き手が指示対象についての直示的思想 (demonstrative thought) を保持することが、文を理解するために要求されると主張する (Evans 1982, p. 148)。この主張が正しければ、直示的単称名辞が指示対象を持たない場合、話者の発話の内容は理解され得ず、聞き手によって直示的思想は保持されることはない。したがって、エヴァンズはこのタイプの単称名辞がラッセル的単称名辞であると主張する。

エヴァンズのラッセル的単称名辞の議論は、彼の単称思想の擁護と密接に関連する。つまり、エヴァンズはラッセル的単称名辞を含む文によって表現される思想こそが単称思想に他ならないとみなす。つまり、ラッセル的単称名辞は、指示対象が存在しないならば、話者がそれを含む文を理解し得ず、記述によって置換できない単称名辞であり、そのような単称名辞を認めるならば、必然的に単称思想を認めなければならない。なぜならば、ラッセル的単称名辞が指示対象を持たないにもかかわらず、それを含む文を聞き手が理解できる場合、もはやラッセル的単称名辞は記述と置換可能な通常の単称名辞として直接的な対象指示の機能を失うためである。

このように、エヴァンズの戦略は、ラッセル的単称名辞を認めるならば、単称思想の領域を認めなければならないと主張することにより、単称主義を擁護することが目的である。そして、この戦略はレカナティ等の「新フレーゲ主義」と呼ばれるフレーゲ的着想に基づき、なおかつ単称主義を擁護する立場の哲学者たちにとって重要な着想となった。以下ではレカナティの単称主義をめく

る議論を概観し、どのようにフレーゲ的立場と単称主義が両立可能なのかを検討しよう。

### 3. レカナティの単称主義

#### 3.1 非記述的意義としての心的ファイル

レカナティの単称主義の擁護は、エヴァンズの同じ方針を採用し、ラッセルの見知りの制約を弱め、外的世界の個体的対象も含められるように再解釈することを目指す。そのために、レカナティはフレーゲ的指示 / 意義の区別を含む二元的意味論 (two-dimensional semantics) を受け入れる。しかし、フレーゲは直接指示の理論を主張する哲学者が批判したように、明白に記述主義的傾向を有した。フレーゲは「意義と意味について」において、固有名の意義が記述であることを示唆しているように思われる。

「アリストテレス」のような本来の固有名の場合には、その意義についての見解が分かれるということは、当然ありうる。たとえば、その固有名の意義をプラトンの弟子で、アレキサンダー大王の教師である というように解することもありうるであろう。こう解する人は、「アリストテレスはスタゲイラで生まれた」という文に対して、この名前の意義をスタゲイラ生まれで、アレキサンダー大王の教師と解している人とは、異なった意義を結び付けていることになるだろう。(Frege 1892, p.72, f. 2, 邦訳 p.43)

クリプキはこの脚注を典拠にフレーゲを記述主義とみなし、批判する (Kripke 1980, p.30, 邦訳 33 頁)<sup>(3)</sup>。クリプキの批判に抗して、ガレス・エヴァンズはフレーゲの着想を引き継いだとしても、それが直ちに記述主義にコミットするわけではないと主張する (Evans 1982)。

エヴァンズの主張は一見したところ、奇異なものに思われるだろう。上述のように、フレーゲは思想に個体的対象が含まれず、意義のみによって構成されるとみなした。それゆえに、ラッセルはフレーゲの意味論を受け入れると、世界との直接的な結び付きが失われ、単称思想を放棄することになると考え、固有名は指示機能のみを有するとは主張した。

しかし、エヴァンズは、フレーゲ的意味論には記述的意義のみならず、非記述的意義 (non-descriptive sense) の余地が残されており、フレーゲの意義を記述主義的に解釈するのは誤りであると主張する。すなわち、

指示対象を確定するための記述条件を与える記述的意義に加え、見知りに対応する単称思想を保持するための非記述的意義の余地がフレーゲの体系においても残されている。この非記述的意義によって、フレーゲ的意味論においても、単称思想を取り扱うことができるとエヴァンズは主張する。

このエヴァンズの着想を引き継いだレカナティは、ラッセルの一元的意味論は誤りであると主張し、非記述的意義の理論を展開する。レカナティは、非記述的意義を「心的ファイル」と自らと呼ぶ概念と同一視する<sup>(4)</sup>。心的ファイルとは、環境の中の特定の対象に関して主体が保持する情報をまとめるファイルであるが、この着想は萌芽的にエヴァンズにも含まれていた (Evans 1973, p. 199ff)<sup>(5)</sup>。レカナティはこのエヴァンズの着想を展開し、統一的にファイルのオペレーションを説明するフレームワークを提示する。

レカナティによると、心的ファイルは、客観的な記述とは異なり、主体の認知的環境や言語的知識に依存して変化しうる主観的な内容 (e.g. かつこいい等) を含む、様々な情報を格納する。レカナティはラッセルの見知りを拡張し、認識的に有益な関係 (epistemically rewarding relation) (ER 関係) を通じて心的ファイルが獲得されるとみなす。換言すれば、心的ファイルを獲得するための ER 関係はラッセル的基準を満たさなくてもよい。心的ファイルの情報は誤りであってもよく、その場合でも情報が帰属される対象に対して主体はなんらかの単称思想を抱くことが可能である。しかし、このことは単称思想についての真偽が問えないことを意味するのではない。レカナティは単称思想を次のような単称真理条件をもつと主張し、指示対象に真理値が依存すると主張する。

任意の可能世界  $w$  について思想が真であるのは、 $w$  において、...  $x$ ... であるような対象  $x$  が存在する場合、かつその場合に限る。(Recanati 2013, p. 15)

主体が文を使用して表現する命題は、対象についての考え方や指標詞の規約性を含む、言語的意味によって分節化された真理条件的内容であるとレカナティは考える<sup>(6)</sup> (Recanati 1993)。したがってレカナティは、ある単称名辞が直接的に対象を指示する場合、その単称名辞を含む文が表現する命題は、指示対象に依存する単称命題に他ならないと主張する。このように、ラッセルの見知り

の基準を拡張することにより、単称主義は対象についての直接的なむすびつきを独断的に受け入れているという記述主義の批判を回避し、単称主義の擁護が可能であるとレカナティは主張する。

### 3.2 見知りなしの単称思想

レカナティが新フレーゲ主義から継承したもうひとつのアイデアは、思想媒体 (thought-vehicle) と思想内容 (thought-content) の区別である。これら区別は、単称思想媒体をトークン化するために必要な条件と単称思想内容を思考するための必要な条件の間の区別に対応する。レカナティによると、媒体という意味での単称思想を思考するためには、心的ファイルを作動 (activate) させれば足りる (Recanati 2012, p. 166)。心的ファイルの役割は、指示対象にかかわる見知りに相当する ER 関係を通じて得られた情報を蓄積することだが、そのような心的ファイルは見知りがなくても展開することは可能である。これは、特定の対象に対する現段階での見知りがなくても、将来の見知りを期待し、心的ファイル内に情報を蓄積することが可能であるためである<sup>(7)</sup>。たとえば、「切り裂きジャック (Jack the Ripper)」という名前は、特定の殺人事件を起こした人物を指示するために導入された記述名である。しかし、われわれはその指示対象について実際の見知りを持たないため、「しらかの殺人事件を起こした人物」のような記述によってしか知ることはできない。しかし、「切り裂きジャック」のような記述名の指示対象が記述によってしか知ることができないとしても、主体がその対象を将来的に見知ると予想する場合、その対象についての情報を蓄積するための心的ファイルが必要とする。したがって、記述によってしか知られない名前の指示対象の場合でも、心的ファイルを展開することが可能であるとレカナティは主張する (Recanati 1993, p. 180)。

さらに、レカナティは期待される見知りすら、心的ファイルを展開するためには必ずしも必要ではないと主張する。例えば、「20世紀半ばの平均的アメリカ人 (the average mid-twentieth-century American)」について思考するとき、仮にある名前 (e.g. 「ボブ」) を与えて、その人物について「ボブはドクターペッパーが好きだ」のように、ものごとを述語付けてもよいのである。この場合、この人物とのいかなる見知りも期待することはできない。この意味で、ここでの名前の機能は寄生的であ

る。心的ファイルの主要な機能は情報の蓄積であり、心的ファイルを展開する典型的な理由は、情報に対する期待である。だが、対象を見知ることによって情報が得られる期待が無い場合ですら、前述のように単称媒体（前述の例では、「ポブ」およびその下に蓄積された情報）を通じて思考する理由を持ちうるとレカナティは主張する (Recanati 2012, pp.168-169)。

以上のような心的ファイルの生成に関する条件に加えて、さらに心的ファイルの成功条件を与える際にもまた、レカナティはエヴァンズの議論を参照する。すなわち、単称思想を成功裡に保持するためには、思想媒体を保持するだけでは十分ではなく、思想内容を保持しなければならない (Recanati 2012, p.169)。だが、ラッセルの強い見知りの立場に戻ることを選ぶのでないかぎり、思想内容の保持は、少なくとも心的ファイルの指示対象との見知りの期待はある、ということ代替される。前述の、「20世紀半ばの平均的アメリカ人」の場合には、この期待が成立しない。それゆえ、この場合は思想媒体という意味では単称思想をもつことが出来るが、思想内容という意味においてはもっていないということになる。別の例を検討してみよう。たとえば、天文学者ルヴェリエが存在を予測し、後に実際に発見された海王星と、実際には存在しなかった惑星バルカンのケースを考えてみよう。両方のケースにおいて、ルヴェリエはそれらの惑星の存在を予測し、情報を蓄積するために心的ファイルを作成した。しかし、ルヴェリエの予測は海王星のケースでは正しかったが、惑星バルカンのケースでは間違っていた。このケースでは、「惑星バルカンの発見は天文学に貢献するだろう」とルヴェリエが考えたとき、単称名辞「惑星バルカン」は使用されたにもかかわらず、対象が適切な性質をもつまにその場合にルヴェリエの思想が真であるような対象  $x$  が存在しなかった。このような場合、単称思想内容は保持されない。

以上のように、レカナティは単称思想の保持に関して見知りの制限を課さない「リベラルな見解 (liberal view)」を採用する (Recanati 2012, p.168)。しかし、この見解は、いかなるものについての単称思想も無条件に保持しようということの意味しない。ラッセルが見知りの有無によって区別しようとしていた問題（対象と結びついた思考/項 (term) と、結びつかない思考/項の区別）は、心的ファイルを作動する際の見知りの期待という条件によって代替される。

### 3.3 心的ファイル・フレームワークのオペレーション

以上のように、心的ファイルは直接的見知りによって得られない対象についても獲得される。ER 関係は伝達の連鎖による情報獲得を含み、たとえばキケロについてわれわれは直接的に見知ることはできず、ただ著作を通じたり、伝聞によったりすることによってのみ知ることができるが、その際にもキケロに対して ER 関係に立つことが可能である。これが可能であるのは、われわれは名前「キケロ」の社会的に受け継がれた因果的連鎖によって、指示対象に対する関係を保持することができるためである。したがって、われわれは「キケロ＝タリー」のようなトリヴィアルではない同一性言明に関する単称思想を保持することができる。しかし、このような名前の言語的意味が因果的連鎖によって社会的に構成されるとすれば、「キケロ＝タリー」タイプの同一性言明の認知的重要性ないし情報付与性の差異をどのように説明するのかという問題に直面する。フレーゲは名前「キケロ」と「タリー」に結び付けられた意義が異なると説明することによって、そのような同一性言明の情報付与性を説明する。フレーゲの方針は問題への解答となるが、ファインは以下のようにフレーゲ的立場を批判する。

... [ふたつの名前に結び付けられた意義の間の] 相違がなければならぬと考えることには正当な理論的根拠があるように思われる。だが、特定の場合において相違がなんであるかについて述べることは困難だろう。というのも、Kripke (1980) が指摘したように、「キケロ」と「タリー」のような、ふたつの名前に同じ信念ないし情報を結び付けることは、話者あるいは話者たちにとって可能であるように思われるからだ。そして情報あるいは信念が同じであれば、どのように意義は異なるのだろうか? (Fine 2007, p.35)

レカナティはファインの批判に対して、次のように回答することによってフレーゲ的意味論を擁護する。「キケロ」と「タリー」に結び付けられたフレーゲ的意義とは、主体の心の中のキケロ・ファイルとタリー・ファイルに他ならない。確かに、キケロ・ファイルとタリー・ファイルの中の情報は、たとえば「ローマの有名な弁論家」のように同一であるかもしれない。だが、それは意義つまり心的ファイルが同一であることを意味しない。心的ファイルのタイプは、それらを獲得した際の情報経路に対応する。つまり、複数のファイルが完全に同一の

情報を含むとしても、それらの獲得の経路が異なれば、異なるファイルとみなされる (Recanati 2012, pp. 40-41). 主体は「キケロ＝タリー」という更なる情報を得ることにより、キケロ・ファイルとタリー・ファイルはリンク (link) される。このリンク化のオペレーションにより、情報は一方のファイルから他方のファイルへ自由にフローすることが可能になり、情報の統合や利用が可能になる。

以上のファイル・オペレーションは同一性に関するものであるが、レカナティの心的ファイルのフレームワークは、主体の様々な情報に対する心的作用をファイル・オペレーションによって説明する。ある場合には認知的情報によってファイルに含まれる情報が更新されることによって、複数のファイルが統合・合併され、ある場合には主要なファイルへ吸収されたり、ファイルが破棄されたりする。このようにして主体の認知的作用が説明可能であるとレカナティは主張する。

#### 4. 結び

これまでの議論を簡単に振り返り、単称主義をめぐる議論の帰結を検討しよう。

フレーゲとラッセルの単称思想をめぐる対立は、対象との直接的な関係をどのようにして確保するかというものだった。ラッセルはフレーゲの意義を擁護すると対象との直接的関係を保持することができなくなると考え、知覚による見知りによる関係を導入した。しかし、ラッセルはその代償として、見知りの対象をセンス・データに限定するという強い制約を課さなくてはならなかった。そのため、ラッセルを批判する記述主義者は、見知りによる直接的関係を哲学的ドグマとして攻撃し、単称思想を放棄した。

記述主義に抗して、クリプキやカプラン等は、直接指示説にもとづいて単称主義を擁護するが、認知的重要性の問題に直面する。エヴァンズとレカナティは、フレーゲの意味論と単称主義を融和させ、ラッセルの見知りを拡張する穏健な方針を採用する。フレーゲの意義に相当するレカナティの心的ファイルは、ラッセルの見知り関係を拡張した認知的に有益な関係 (ER 関係) によって得られるが、この際にラッセルの制限を満たさなくてもよい。主体が心的ファイルに格納する情報は客観的記述である必要はなく、主観的情報や誤情報も許容される。そして、心的ファイルは、認知的重要性の説明の役割を

果たす。そして、異なる心的ファイルのリンク化オペレーションにより、「キケロ＝タリー」などのトリヴィアルではない同一性言明の認知的重要性に関する問題に回答を与える。これにより、レカナティは、単称主義の問題点であるラッセル的制約と認知的重要性の問題を克服することができるかと主張する。

しかし、レカナティの単称主義に対してはふたつの課題があるだろう。ひとつ目の課題は、主体と対象とのあいだに結ばれる ER 関係の評価である。レカナティは、ラッセルの見知りを拡張することによって、対象とのなんらかの仕方の関係によって心的ファイルを保持し、それによって主体は単称思想をもちうると主張する。このような「リベラルな見解」は、見知りによって課せられたラッセル的制限を回避するためのものである。しかし、この制限を弱めたことによって、ルヴェリエのケースのように誤って対象が存在すると考えたケースや、現実の対象以外の虚構的对象について想像するケースのように、実在しない対象とのあいだの ER 関係によっても心的ファイルを保持できることを許容しなくてはならない。このため、「リベラルな見解」を採用するならば、主体が心的ファイルを通じて存在しない対象についての単称思想をもちうるという不可解な帰結を受け入れざるを得ない。レカナティ自身も、この帰結を回避するために、単称思想を思想内容と思想媒体というふたつの要素に分割し、実在の対象とかがわる場合には、思想媒体のみならず思想内容をもつ真正な単称思想を保持するが、実在しない対象とかがわる場合には、思想媒体しかもたないある種擬似的な単称思想をもつと認める。しかし、虚構にかかわるケースでは、ある主体が真正な単称思想を保持していると考えていたが、結果的には擬似的な単称思想しか保持していなかったこと判明する場合もありうる。このようなケースの場合、主体がどのような思想や信念を保持しているのか、あらかじめ確定する方策を示さなくてはならない。このことは、ラッセル自身が想定しなかった虚構や想像にかかわる様々な問題を引き受けなくてはいけないことを意味するだろう。

この問題を解決する方針がないわけではない。ひとつの方針は、ER 関係を社会的なネットワークへの参与と読み替えて、ある種の構造を与えることである。成瀬 (2014b) では、フレーゲの意義を社会化し、話者が指示を行う場合には、社会的に形成されたネットワーク (語りの歴史) に参与するという指示の因果説とフレー

ゲ主義を組み合わせたモデルを提示した。たとえば、指揮者のヘルベルト・フォン・カラヤンのような人物について語る場合、話者自身はカラヤンについて見知っていないとしても、音楽家や音楽評論家のようにその名前を伝える人物はカラヤンを見知っている。話者はカラヤンを伝える人物の語りと自身の語りを接続し、ネットワークを形成することによってカラヤンについて語ることの保証とする。つまり、直接的にある対象を見知っていないとしても、それを見知っている人物の語りを経由して、当該の対象についての単称思想をもつことができるのである。一方、このモデルでは話者が虚構にかかわる場合、ある種の認識的切断ないしブロックが生じると説明される。つまり、サンタクローズやベガサスについて語る場合、その名前の使用の歴史をさかのぼっていったとしても対象を特定することができず、使用の歴史が途絶える。つまり、いかなる人物もサンタクローズやベガサスを見知っていないため、その語りの歴史というネットワークに参与したとしても、見知りを受け継ぐことはできないのである。しかし、話者は語りの歴史を参照することによって、それがどのようなものであるかを知り、ある種の信念を抱くことができる。その知識や信念は、語りの歴史というネットワークのレベルで保持されているものであり、単称思想とは区別されるものである<sup>(9)</sup>。

以上のような方針を採用すれば、レカナティの ER 関係についての「リベラルな見解」の問題点を、社会的な言説のネットワークを参照することによって回避することができると思われる。以上のレカナティの問題点は、コミュニケーションの可能性をなによって保証するのかということにかかわる。通常、話者と聞き手のあいだのコミュニケーションを保証するのは、言明に現れる名前の指示対象の存在に他ならない。指示対象についての理解が食い違えば、そもそもコミュニケーションが成立せず、談話は破綻してしまう。同一の対象について語っているという事実が、話者と聞き手のあいだのコミュニケーションを成り立たせるための鍵となるのである。しかし、指示対象をもたない名前（空名）を使用する場合、このようなコミュニケーションを成立させるための対象が存在しない。そのため、話者と聞き手のあいだでどのような了解があり、なにについて語っているのかを説明しなくてはならない。レカナティの立場では、コミュニケーションを成立させるための同一性を確保するためには不十分であり、別の道具立てを必要とする。それゆえ

に語りの歴史が必要となるのである。

ふたつ目の課題は、言語哲学の根幹にかかわるより大きな問題を提起する。エヴァンズ流の単称主義は受け入れるレカナティは、単称文 'a is F' の表す思想の理解を単称名辞 'a' を理解する能力と述語 'F' を理解する能力の複合とみなす。したがって、'a is F' の単称真理条件を理解するためには、対象 a についての知識（心的ファイル）と述語 'F' についての知識（概念）の複合となる（cf. Evans 1982, p.100ff）。このエヴァンズ＝レカナティ的単称主義は、思想に対する言語の優位性を逆転させるという帰結を伴う。ダメットはこの点のある種の主観的心理主義に陥ると主張し、激しく批判している（Dummett 1991）。本稿の目的を逸脱するためにダメットの見解について精査することはできないが、彼の哲学の中心的な見解は、「言語の思想に対する優位性ないし先行性」と言い表すことができるだろう<sup>(9)</sup>。ダメットはこの「言語優位テーゼ」とも呼びうる主張を掲げ、言語哲学の中心的な見解とみなす。これに対し、エヴァンズやレカナティは「思想の哲学（philosophy of thought）」を掲げ、ダメットの見解に反対している。この論争は、言語が先か、思想（古い哲学用語では「観念」）が先か、という哲学史上では古くて新しい問題を提起する。このことは、単称主義をめぐる論争が、一見したところ言語哲学のごく狭い関心領域にもとづくように思われるが、実のところ哲学的伝統に根差した大きな問題をはらんでいることを示すひとつの証拠と見做しうるだろう。

最後に、ダメットの批判に対してレカナティの心的ファイル・フレームワークが取りうる戦略は、認知科学、言語学など関連諸分野の成果を組み込むことによって、言語に対する思想の優位性を求めたとしても、必ずしも主観的心理主義に陥るわけではないと主張することである。実際、レカナティの主体の認知的変化をファイルのオペレーションによって説明する戦略は、狭義の言語哲学を超えて、認知科学や談話表示意味論、情報構造理論と強い親近性をもつ（Recanati 2012, pp.3-4）<sup>(10)</sup>。レカナティのフレームワークが関連諸分野の成果を取り込み、アド・ホックではない仕方で言語習得や認知関係を説明できるかどうかは今後の検討課題であるが、それらを説明するための有望な立場のひとつと言えるだろう。

脚注

- (1) e-mail: sho.naruse1987@gmail.com
- (2) チザムの「斑の鶏」の議論がラッセルへの正当な批判となっているかについては評価が分かれるが、ここではこの問題について取り扱わない。
- (3) しかし、飯田 隆はフレーゲが記述主義を採用していたことを否定する。  
「...フレーゲについて言えば、単称名の意義 Sinn が常に記述によって与えられると明言している個所は、かれの著作中のどこにもないということが挙げられる。それどころか、いかなる記述によってもその意義 Sinn を表現することができないような単称名が存在するという主張を、フレーゲから引き出すことさえ不可能ではない。(その典拠としてはフレーゲ晩年の論文「思想 Gedanke」での一人称代名詞の扱いがしばしば挙げられる)」。 (飯田 1995, pp. 329-330 f. 13)
- (4) レカナティは、心的ファイルとフッサールのノエマの親近性を指摘する。心的ファイルとノエマとの関連については、成瀬 (2015b) において論じられる。
- (5) エヴァンズ以前にも、グライスが確定記述の指示的用法 (Grice 1969, pp.140-44) を説明するために導入し、ストローソンも同一性言明 (Strawson 1974, pp.54-56) を説明するためにファイル概念に訴えた。
- (6) Recanati 1993 の議論は、指標詞のケースを念頭に置いている (ibid. chap.5-7)。レカナティによると、指標詞を用いたコミュニケーションにおいて対象についての特定の考え方が指定されるのは、その特定の考え方と指標詞に慣習的に結び付けられた言語的意味との間に一定の対応関係が存在する。レカナティは心的ファイルの指標性を強調し、指標モデルを提示するが、このモデルが固有名に対しても適用されるのかどうかは本稿では論じることができない。
- (7) ジェションは「子供の想像上の友達」という例を挙げる (Jeshion 2010, p.136)。
- (8) ネットワーク・レベルの思想という着想については、Perry (2012) や成瀬 (2015b) において検討される。
- (9) ダメットはこの見解がフレーゲに由来し、それゆえにフレーゲが言語哲学の祖であると主張する。フレーゲがダメットの主張する見解を保持していたかどうかは議論が分かれるが、成瀬 (2014a) ではフレーゲの言語優位性が検討される。
- (10) レカナティのフレームワークと談話表示意味論の比較検討については、成瀬 (2015a) を参照。

参考文献

- Chastain, C. (1975) Reference and Context, in K. Gunderson (ed.), *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, 7, University of Minnesota Press, pp.194-269.
- Chisholm, R. (1942) The Problem of the Speckled Hen, *Mind*, 51, 204, pp.368-373.
- Dummett, M. (1991) *Frege and other Philosophers*, Oxford U. P.
- Evans, G. (1973) The Causal Theory of Names. *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supp.vol. 47, pp.187-208.

- (「名前の因果説」池田 さつき, 佐藤 康之, 松坂 陽一訳, 松坂 陽一編 (2013) 収録)
- (1982) *The Varieties of Reference* (edited by J. McDowell). Oxford: Clarendon Press.
- Fine, K. (2007) *Semantic Relationism*. Oxford: Blackwell.
- Frege, G. (1892) *Über Sinn und Bedeutung*, in Frege (1967) (「意義と意味について」, 野本 和幸訳, 松坂 陽一編 (2013) 収録)
- . (1967) *Kleine Schriften*, Hildesheim, Olms
- . ((1976) *Wissenschaftlicher Briefwechsel*, hrsg. G. Gabriel, H. Hermes, F. Kambartel, C. Thiel, und A. Veraart, Hamburg: Felix Meiner (『フレーゲ著作集第6巻 書簡集付「日記」』野本和幸編訳, 2002年, 勁草書房)
- Grice, P. (1969) *Vacuous Names*. In D. Davidson & J. Hintikka (eds.) *Words and Objections*, pp.118-45. Dordrecht: Reidel
- Hawthorne, J. and Manley, D. (2012) *The Reference Book*. Oxford.
- Jeshion, R. (2010) *Singular Thought : Acquaintance, Semantic Instrumentalism, and Cognitivism*. In R. Jeshion (ed.) *New Essays on Singular Thought*, pp.105-40. Oxford: Clarendon Press.
- Kripke, S. (1980) *Naming and Necessity*. Oxford : Blackwell. (『名指しと必然性 様相の形而上学と心身問題』八木沢敬, 野家 啓一訳, 産業図書, 1985年)
- Perry, J. (2001 1<sup>st</sup>. ed. /2012 2<sup>nd</sup>. ed.) *Reference and Reflexivity*. Stanford: CSLI Publications.
- Recanati, F. (1993) *Direct Reference: From Language to Thought*, Blackwell
- (2012) *Mental Files*. Oxford University Press.
- Russell, B. (1910-11) *Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description*. *Proceedings of the Aristotelian Society* 11, pp.108-28.
- (1912) *The Principles of Philosophy*. London: Williams and Norgate.
- Strawson, P. (1974) *Subject and Predicate in Logic and Grammar*. London: Methuen.
- 飯田 隆 (1995) 『言語哲学大全 III - 意味と様相 (下)』勁草書房
- 松坂 陽一編 (2013) 『言語哲学重要論文集』, 春秋社
- 成瀬 翔 (2014a) 「フレーゲにおける概念馬のパラドクス」『中部哲学会年報』第45号, 59-71頁.
- (2014b) 「空名の指示の理論と現代フレーゲ主義の可能性」(博士論文: 名古屋大学)
- (2015a) 「言語哲学と言語学 - 哲学と個別科学の共同可能性」『哲学と現代』第28号, 40-54頁.
- (2015b) 「ノエマと心的ファイル」『フッサール研究』第12号, 1-15頁.